

## 論 文

シスモンディの「遺産」  
の構成上の変化と行方

—1932年まで—

小 池 澂

## I. はじめに

前稿において私は、シスモンディの「遺産」にはどのようなものがあるのか、またそれらはいかなる時代にどのようにして形成されたのか、などといったことについて概説した<sup>1)</sup>。本稿はそれに続いて、1932年までの時期における彼の「遺産」の構成上の変化と行方を探ろうとするものである<sup>2)</sup>。

ここで1932年というのは、サリスの筆になるシスモンディ伝<sup>3)</sup>が公刊された

- 1) 小池澂「シスモンディ研究序説——シスモンディの生涯と彼の遺産」(上)(中)(下)(完), 『関西大学経済論集』第42巻第6号, 1993年3月; 第43巻第3号, 1993年8月; 第43巻第5号, 1993年12月; 第43巻第6号, 1994年3月。
- 2) 本稿は, 1991年9月21日開催の経済学史学会関西部会第117回例会における私の報告「シスモンディの著作をめぐって——ペッシャ町立図書館所蔵のシスモンディ・コレクションを中心に」(これの要旨は『経済学史学会年報』第30号, 1992年11月, 159~160ページに掲載されている)のごく一部分を敷衍したものである。その報告の際には京都産業大学の橋本比登志教授から, あるイタリア人名の読み方にかんして貴重なご指摘を賜った。地名をも含めて一般にイタリア語の固有名詞の読み方等については, のちに, 本学の鶴嶋雪嶺教授を煩わせて紹介していただいたトリーノご出身の大阪外国語大学外国人教師(1992年当時の職名)アントニェッタ・パストレー(Antionietta Pastore)氏にもお教を仰いだ。これら3名の先生方には改めて感謝の意を表したい。ただし, 本稿におけるイタリア語の固有名詞の日本語表記法は, 1994年の3~5月に再訪したペッシャ(Pescia)の人々の発音上のパフォーマンスをも考慮に入れながら私自身が案出したものである。
- 3) Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe*, Paris, 1932.

年のことである。その年を目安にしてシスモンディの「遺産」の構成上の変化と行方のプロセスに区切りを設けるのは、さしあたりは、同書がシスモンディ研究史上の一大記念碑とされてきたからである。では、なぜサリスの伝記はそのようなものとしてとり扱われてきたのか。これにはさまざまなわけがあるであろう。だが、きわめて外在的なこととはいえつぎのような事情も幾らかは関係しているのではなからうかと思われる。すなわち、シスモンディの「遺産」の構成上の変化は基本的には1932年までに遂げられており、同年よりあとには彼の「遺産」の構成ばかりでなくその所在地<sup>4)</sup>にも重大な変更はみられなかった、と。そしてまさにこのことが、1932年までの時期に限定して彼の「遺産」の構成上の変化と行方とに探りを入れようとする根本的な理由なのである。

ただしそうする際には、シスモンディが彼の存命中にみずから公にしていた作品は、これをはじめから調査の対象の外におくことにする。前稿に示したようにシスモンディの「遺産」は、彼の生前には公にされていなかった彼自身の作品と、彼自身が公にしていた作品と、彼が受けとって後世に伝えた文書類とに大別することができるのであるが、そのうちの第2の作品群の構成は、彼の死の時点ですでに最終的に固定化されてしまっていたのであって、爾後には金輪際変化の仕様がなかったからである。と同時に、この作品群に属する彼の著書やパンフレットや雑誌論文や新聞記事等の所在は、世界中の図書館の所蔵文献にたいして木目細かな情報網が張りめぐらされている今日においては比較的簡単につきとめることができるであろうと思われるからでもある。つまり、彼の「遺産」の中の第2の作品群の場合には構成上の変化と行方とを問題にする必要が認められないのである。

だがしかし、同じシスモンディの「遺産」の中でも第1の作品群と第3の書

---

4) シスモンディの「遺産」の所在地とはいっても、それは、国または市町村のレベルでのことなのであって、そこに存在するたとえば図書館等の施設や個人の家屋のレベルでのことではないのである。

類群についてはそうはいえない。これら2つの群に属する手書きの書類、たとえば彼の日記、手紙、覚え書き、抜き書き、さまざまな種類の習作、著書や論文等の下書き原稿、講義用原稿、遺言状、それに彼あての手紙、彼の父親や母親や妹の書類、等々がそっくりそのままの形で残っているのかどうか、残っているとすればどこに保存されているのか、などといったことは既成のレファレンス・ブックやデータ・ベースによってはほとんどまったく知ることができない。それらのことを知るためには、当の手書きの書類群の構成上の変化を、そしてさらには構成要素の行方を辿ってみなければならない。ところが上述したように、1932年よりあとにはシスモンディの「遺産」の所在地と構成とに大きな変化はみられなかった。とするならば、なによりもまず同年までの時期に視野を限定して彼の「遺産」の、とはいっても事実上はその中の第1と第3との手書きの書類群の、構成上の変化と構成要素の行方とを探索してみる必要がある、ということになるであろう。しかもそうすることは、1932年の時点で利用可能であったかぎりでの彼の「遺産」のみに依拠したサリスのシスモンディ像を相対化するための、基礎的な作業の1つでもあるのである。

以上のようなわけで、本稿においてはシスモンディの「遺産」の中でもとくに彼の生前には公にされていなかった彼自身の作品と、彼が受けとって後世に伝えた文書類とをとりあげて、1932年までの時期におけるそれら手書きの書類群の構成上の変化と構成要素の行方とを探ってみることにする。もう少しだけ詳しくいえば、本稿のⅡでは彼の日記の破棄ないし焼却をはじめとする問題の書類群の構成上の基本的な変化に、そしてⅢではサリスによって提示された「シスモンディの手紙と草稿の保管所」一覧に基づきながら個々の書類の所在に、それぞれ探りを入れてみようというのである。その結果は最後のⅣにまとめられる。この節においては同時に、続稿の中心課題が示されることにもなるであろう。

## II. シスモンディの「遺産」の構成上の基本的な変化

そもそもシスモンディが1842年6月25日にジュネーヴ郊外のシュース(Chêne)において69歳の生涯を閉じたとき、ひとは彼からどのような「遺産」をどれだけ受けとっていたのであろうか。残念ながらこの疑問を解消させることはとうていできそうにない。彼の「遺産」のすべてを網羅するような目録が彼自身によって、またはあの当時のほかの誰かによって作成されていたという形跡は、これまでのところどこにも認められないからである。

確かにサリスのシスモンディ伝には、「〔1842年5月〕29日と31日に彼〔シスモンディ〕はみずからの作品の目録をつくった」<sup>5)</sup>と記されている。また、その「目録」の第三者による「摘要」がシスモンディの死の少しあとに公表されてもいる<sup>6)</sup>。だがそれらの「摘要」をみるかぎり、当の「目録」は、主として著

5) Salis, *ibid.*, p. 463. ただし、[ ] 内は引用者による解説——この点は以下においても同様である。なお、引用文中の「目録」は、つぎの文献によれば現在ペツシャの町立図書館 (Biblioteca Comunale) に保存されているようなのであるが、それを閲覧する余裕は私にはなかった。Aldo G. Ricci, *L'Archivio Sismondi, Archivi e cultura, rassegna dell'Associazione Naz. Archivistica Italiana*, XIII, gennaio-dicembre 1979, p. 130.

6) 当該「摘要」は、つぎの諸文献において公表された。[David François Munier,] *Notice sur J.-C.-L. de Sismondi*, (Extrait de *l'Album de la Suisse romande—Mai 1843*), s. d., pp. 3-4 et 17-19; *Political Economy, and the Philosophy of Government: A Series of Essays Selected from the Works of M. de Sismondi*, London, 1847, pp. [457]-459. これら2点の文献のうちの後者は、その刊行の1世紀余りのちにつぎのようなタイトルのもとに覆刻されることになった。 *Political Economy and the Philosophy of Government: Selections from the Writings of J. C. L. Simonde de Sismondi*, New York, 1966. また、本注の最初に掲げた文献の17~18ページと19ページとにみられる 'Tableau chronologique des ouvrages de Sismondi' と 'Opuscules de Sismondi' とは、いっそうの簡略化を被りながらもつぎの文献に再録されることとなった。Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits, suivis d'une liste des sources et d'une bibliographie*, Paris, 1932, pp. 68-69. ちなみに、この文献の[61]~67ページにはサリス自身の作成にかかるシスモンディの著作の目録が掲載されている。その目録こそ、今日までの長

書のタイトル、出版地、巻数、版型、出版年等を明示しながら彼の生涯にわたる著作活動を年代順に記録し、あわせて雑誌論文の抜刷とパンフレットとのタイトルの数を主題別にまとめたものにすぎないのであって、そこには「自由な諸人民の政体にかんする調査研究」以外の彼の未公開の作品は、恐らく1点も採録されていなかったのではなかろうかと思われる。彼が受けとって後世に伝えることになった文書類ともなれば、もはやすべてが別人の「作品」であったはずである<sup>7)</sup>から、そのようなものが死の数週間前のシスモンディの手になる「みずからの作品の目録」にぜんぜん盛り込まれていなかったとしてもけっして不思議なことではないであろう。したがってその「目録」は、本節の冒頭に掲げた疑問を解消させてくれるものではなかったに相違ない。彼が死去した時点における彼自身の「遺産」の、とりわけ彼の未公開の作品と彼が受けとって後世に伝えた文書類との細目については、現在のところ知るよしもないのである。

とはいえ、その中にはまぎれもなくシスモンディの自筆の日記がみいだされた。この点については幾つかの積極的な証言が残っている。それよりなにより、1857年には彼の日記の「諸断片」が公にされていた<sup>8)</sup>。これらのことからさらに、その日記の現物の行方を追求してみようとする向きが現われたとしても当然であろうとさえ思われる。事実、イタリアの研究者ベルナルディーニ・スタンゲッリーニ (Mirena Bernardini Stanghellini) は、1970年開催の「シスモンディ国際シンポジウム」での報告のために彼女自身が作成したといわれる

---

い間にわたって、例の「摘要」をはるかに凌ぐシスモンディの著作目録の決定版とみなされてきたものなのである。だがしかし、それには正確さの点でも網羅性の点でも改善の余地が残されていないわけではない。そこで私は別の機会に、サリスによって作成されたその目録に手を加え、一段と充実した内容のものを披瀝したいと考えている。

- 7) この点については前掲の拙稿（完）、109ページ、注68を参照されたい。
- 8) シスモンディの日記の「諸断片」は、つぎの文献において公にされた。J. C. L. de Sismondi, *Fragments de son journal et correspondance*, Genève et Paris, 1857, pp. [65]-71 et 78-107.

署名入りのディスカッション・ペーパーにおいて、つぎのような提案を試みたことがあった。すなわち、「〔シスモンディの〕日記にかんしては、当該歴史家の親戚にあたると同時に彼の親友でもあったボッスイ伯爵〔ママ〕の子孫のあたりに、少しばかり探りを入れてみるとよいかもしれない（といっても彼らがまだ生きていたらの話であるが）。彼は死ぬ直前に、遺言状の中で、シェーヌの家をボッスイ伯爵に遺贈すると述べていたのであるから<sup>9)</sup>、と。

だがしかし、その提案をやがて彼女はみずから撤回することになった<sup>10)</sup>。けだし、シスモンディの自筆の日記は彼の死後に破棄されてしまったのだという諸証言を、信憑するに足るものと認めることができたからであろう。私自身も当面のところはそれらの証言に基づいて、彼の日記の現物はすでに破棄ないし焼却されてしまっているのだと考えている。

だが、破棄ないし焼却の時期については必ずしもはっきりとしたことはわからない。サリスはこれを「1853年」と推定している<sup>11)</sup>。「1853年」といえば、シスモンディ夫人ジュシー・アレンが他界した年であった。彼女は夫が死んでしばらくすると、恐らくは彼の日記を携えて、彼女自身の母国であるイギリ

9) Mirena Bernardini Stanghellini, *L'Archivio Sismondi nella Biblioteca civica di Pescia*, [1970], p. 4. このディスカッション・ペーパーの現物は、ペッシャの町立図書館に保存されている(整理番号:M-4-26)。なお、引用文中の「遺言状」のくだりについて詳しくはつぎの文献を参照されたい。J. C. L. de Sismondi, *Second codicille du 21 juin 1842, reproduit par Salis, Sismondi, 1773-1842, lettres et documents...*, p. 39.

10) 本文中にひきあいにした「シスモンディ国際シンポジウム」の3年後にその記録が公にされたのであるが、つぎに掲げるバルナルディーニ・スタンゲッリーニの報告記録の部分には、もはや問題の提案はみることができない。Mirena Bernardini Stanghellini, *L'Archivio Sismondi nella Biblioteca civica di Pescia, negli Atti del colloquio internazionale sul Sismondi, (Pescia, 8-10 settembre 1970)*, Roma, 1973, pp. [247]-255.

11) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 377 n. 3. ただし、サリスの推定の根拠は必ずしも十分なものではない。というのも彼は、本稿の後注14に掲げる文献を唯一のよりどころとしているからである。

スにひきあげていった。そうして、「それらの日記は私〔ジェスィー〕が死んだら読まずにすぐに焼き捨ててほしい」との願いを託した2人の妹<sup>12)</sup>に見守られながら、1853年3月3日に夫のもとへ旅立ったのであった<sup>13)</sup>。あとに残された2人の妹のうちの年下のほうは、通称ファニー・アレン (Fanny Allen) というのであるが、その彼女は姉ジェスィーの死の3カ月余りのちの同年6月13日にみずからの姪の1人に手紙を書いて、つぎのように告白することになった。「それは痛ましいことでした。彼女〔ジェスィー〕とシスモンディの日記の破棄の件です。とくに後者の日記についてはそう思われます（私にとってはね）」<sup>14)</sup>、と。これらのことを思い浮かべるなら、「1853年」の3月3日から6月13日までの間にシスモンディの自筆の日記が破棄ないし焼却されたというのは、けっしてありえないことではないと判断してさしつかえないであろう。

しかしこのように述べると、その推定はシスモンディの日記の「諸断片」が1857年に公表されたという上記の事実と矛盾しないのであろうか、といった疑問を抱く向きもあるかもしれない。そうした疑問をあらかじめ封ずるのかのごとくに、サリスはこう解説している。「その日記については、当該歴史家〔シスモンディ〕の2人の女性の友人の鑑仰に基づく瞞着のおかげで惜しむべき焼却を免れたごく少数のバラバラの断片があるのみである。」<sup>15)</sup> 「1857年にモンゴルフィエ嬢 (M<sup>lle</sup> Montgolfier) によって公にされた短い諸断片〔がそれであ

12) Cf. Lettre de Fanny Allen à B. Bossi, [1857,] reproduite en français par B. Bossi, Monsieur le Rédacteur, Correspondance du *Journal de Genève: National, Politique et Littéraire*, n° 130, 28<sup>e</sup> année, mardi 2 juin 1857, p. 3. 本文中の引用は、この文献からのものである。

13) ジェスィー・アレンの臨終の場面については、つぎの文献に引用されているドクター・ダイスター (Dr Dyster) の証言に依拠した。Henrietta Litchfield (ed.), *Emma Darwin: A Century of Family Letters, 1792-1896*, London, 1915, vol. 2, p. 152.

14) Letter of Fanny Allen to her niece Elizabeth Wedgwood, Heywood Lane, 13th June [1853], in *ibid.*, ed. Litchfield, vol. 2, p. 153.

15) Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. [VII].

る)]<sup>16)</sup>、と。

サリスによるこの解説は、それより半世紀余り前の1876年にヴィッラーリによって試みられていたつぎのような説明、すなわち「それ〔シスモンディの日記〕は彼の死後に破棄された。とはいってもひとは幾つかの断片をそのまま残しておいたのであって、これらの断片が1857年に……ジュネーヴで公表されることとなったのである」<sup>17)</sup>という説明を、いっそうあからさまに、というか詳しくいいかえたものであろう。けれどもこのサリスの解説に目を通した読者はそこからさらに、シスモンディの日記がまだ「焼却」されないうちにその幾つかのページが彼の「女性の友人」の1人によって秘かにちぎりとられ、そうしてくすねられた諸「断片」が「1857年にモンゴルフィエ嬢によって公にされることになったのであろう、といった具合に思いの翼を広げてみたくはならないであろうか。かりにそうなるとしたら、サリスのこの解説はなおかつ十分なものではないといわざるをえない。なぜなら、問題の「諸断片」の公表の事実を知ったファニー・アレンが時を移さずボッスイ侯爵に書き送ったといわれる手紙によれば、その「諸断片」は実際にはシスモンディの自筆の日記それ自体の諸断片ではなかったのであって、これのモジョン夫人(M<sup>me</sup> Mojon)による写しであった<sup>18)</sup>からである。引用者でもあるボッスイ侯爵自身によってフランス語に翻訳されたその手紙には、こう書かれているのである。「私たちの姉〔ジェスィー〕の無罪を宣言しておかなければなりません。そうしないと彼女には、夫の信頼を裏切って彼の日記をモジョン夫人に好き勝手に抜き書きさせたという嫌疑がかけられることになるかもしれないからです。あの写しは私たちの姉の知らぬ間に書きとられたものなのです。彼女の生涯の中で、かりそめにも夫の日記の諸断片がいつか公にされてしまうのではないかしらと思っ

16) *Ibid.*, p. 377.

17) Pascal Villari, Une conversation de Napoléon I<sup>er</sup> et de Sismondi, *Revue historique*, 1<sup>re</sup> année, tome 1, janvier-mars 1876, p. 241.

18) この点は、公表された「諸断片」の最初のページによっても確認することができる。  
Cf. Sismondi, *Fragments...*, p. [65].



たことがあったとしたなら、そのときほど彼女にとってつらかったことは、きっとなかったに違いありません。私は覚えています。パリから戻ったときに私たちの姉は、いましがたシスモンディ夫人が拾い読みしてくれたばかりの箇所をもっと注意深く読みなおすためと称してモジョン夫人が彼女の部屋に日記をもってゆこうとするのを、断るだけの機転がきかなかったといっただけで悔んでおりました〔シスモンディ夫人はパリではモジョン夫人の家に泊まっていた——ボッスイ侯爵による注記〕。モジョン夫人が筆写しえたのは、あのときをおいてほかにはありません<sup>19)</sup>、と。

こうして私たちは、シスモンディの日記の「諸断片」が1857年に公にされたという事実との矛盾のおそれを払拭し、安んじて、1853年3月3日から6月13日までの間に彼の自筆の日記が破棄ないし焼却されたと考えることができるようになったであろう。

にもかかわらず私は、シスモンディの自筆の日記がいつ焼却ないし破棄されたのかは必ずしもつまびらかでないと前述した。それは、彼の日記のすべてがいま推定した時期に破棄ないし焼却されたとはいいい切れないからである。というよりむしろ、彼の日記の中には別の時期に焼却されたものもあるのではなかろうかという思いを断つことができないからである。

たとえば、先の「諸断片」の公表の際にみずから進んで「まえがき」を執筆したとみられるジュネーヴのシュヌヴィエール教授 (Professeur Chenevière) の未公表の覚え書きにはボッスイ侯爵を非難したくだりがあるらしく、サリスによるとそこには、「〔侯爵は〕日長の1日を費やしてシスモンディの自筆の書類を焼き捨てた」<sup>20)</sup>と書かれているようである。また、2年間に及ぶ生前最後の

19) Lettre de Fanny Allen à B. Bossi, [1857,] reproduite en français par B. Bossi, *op. cit.*, p. 3.

20) Note autographe inédite du professeur Chenevière, reproduite par Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 377 n. 2. なお、この覚え書きをサリスがひきあいにだしたのは、モンゴルフィエ嬢ばかりでなくシュヌヴィエール教授もまたシスモンディの日記の「諸断片」の公表者の1人であった、とみていたからである。しかも、ほかのところでサリスが引用している同じ覚え書きの中の別の一節を読

ペッシェ滞在を心ゆくまで楽しんだあとの1838年3月に同地のヴァルキューサ(Valchiusa)の屋敷からシェーナの自宅に戻る際にシスモンディ自身が書き残していったデスイデーリ夫妻(Mr. et Mad. E. Desideri)あての手紙の追伸には、こう記されてもいる。「アンリエットゥ(Henriette)〔シスモンディの母親〕が使っていた部屋の白木の整理筆筒の中に母と私の秘密の書類を入れてゆきます。鍵は私の黒い机の中にあります。ついてはわが子デスイデーリ夫妻へのお願いです。それらの書類は私が死んだら読まずに全部焼き捨ててしまうようにとり計らってください<sup>21)</sup>、と。これらの「書類」、すなわちボッスイ侯爵が焼却したといわれる「シスモンディの自筆の書類」とシスモンディ本人がその死後における焼却を指示した「秘密の書類」とには、彼自身の日記が含まれていなかったのであろうか。否とは断言しえないであろう。もちろんそうだからといってただちに、含まれていたときめつけるわけにはゆかない。しかしながら、それらの「書類」はきわめて私的な性格のものであったはずである。とすれば、そこには彼の自筆の日記は含まれていなかったと考えるよりもそれが含まれていたと考えるほうが、いっそう自然なのではないだろうか。このようなわけでひとまず、それらの「書類」には彼の自筆の日記が含まれていたと前提してみることにする。

そうすると今度は、いつ焼却されたのかということになる。これまたわからない。とくにシスモンディがデスイデーリ夫妻にたいして彼の死後に焼却の処

---

んでみると、そこにはシスモンディ夫妻の間での意見の不一致点にかんして、例の「諸断片」に添えられた無署名の「まえがき」にみられるのとまったく同じ内容のことが述べられていた。これらのことから私は、その「まえがき」の執筆者はシェヌヴィエール教授であろうと判断したのである。この点について詳しくはつぎの2点の文献を比較対照されたい。*Ibid.*, p. 382; Avant-propos à Sismondi, *Fragments...*, p. VII.

- 21) J. C. L. de Sismondi, Instructions pour Mr. et Mad. E. Desideri pour l'administration de la campagne de Valchiusa, Valchiusa 12 mars 1838, reproduites par Margherita Chiostrì, *Valchiusa racconta..., uno sguardo al passato, un fiorire di memorie*, Pescia, [1989], p. 97.

置をとるようにと指示していた「秘密の書類」の場合には、それらが本当に焼き捨てられることになったのかどうかという点からしてが定かではない。とはいうものの、シスモンディとデスィデーリ夫妻とは相互に親子同然の関係にあったらしいから、後者が前者の指示に忠実にしたがって彼の死後にその「秘密の書類」を1片も残さずに灰に帰せしめたであろうことは、けっして想像に難くない。しかも、その指示がシスモンディ本人から直接デスィデーリ夫妻に与えられたものであってみれば、件の「秘密の書類」の焼却はシスモンディ夫人の死をまたずに実行されたのではなかろうかとさえ思われてくる。つまり、1853年3月3日～6月13日とは異なった時期におけるシスモンディの日記の一部分の焼却の可能性を否定することができないわけなのであり、したがってまた、彼の日記の焼却ないし破棄の時期については必ずしもはっきりしたことはわからないといわざるをえないわけなのである。

なお、いま引用したシスモンディの置き手紙の追伸は、短いながらも、彼の日記の焼却ないし破棄はシスモンディ夫妻のうちのどちらの指示によるものであったのかという問題をめぐる従来の諸見解の再検討または再解釈を迫るほどの衝撃力を有している。というのも、そこにおいてシスモンディがみずから「母と私の秘密の書類……は私が死んだら読まずに全部焼き捨ててしまうようにとり計らってください」と指示していたことに鑑みるなら、そしてその「秘密の書類」には彼の自筆の日記が含まれていたとするなら、つぎに紹介するサリスらの見解はシスモンディの日記のすべてにあてはまるものとはいえなくなってしまうからである。その見解とは、すなわち、「校訂刊行者の不法法をおそれてそれ〔シスモンディの日記〕が破棄されることを望」み、かつ「命じた」のは「夫人」のほうであったのであって、シスモンディ自身は彼の「遺言状」に「そうした指示」を書きつけるどころか、「自分の日記がいつの日にか後世の人々によって知られるようになることを期待して」すらいたのである<sup>22)</sup>、

22) この一節はつぎの文献に述べられていることを、そっくりそのままの形での引用を交じえながら私自身がまとめたものである。Salis, *Sismondì, 1773-1842, la vie et*

というものである。また、同じ「秘密の書類」にシスモンディの自筆の日記が含まれていたとしてもそれは彼が書き残した日記の一部分でしかなかったということを念頭に置くならば、「彼の厳命により、それは彼の死後に破棄された」<sup>23)</sup>というヴィッラーリの見解のほうも、シスモンディの日記のすべてについて述べたものとは解釈しえなくなってくる。そこで、これらの見解の中の信憑に値する部分のみを抽出してそれを組み合わせてみることにしよう。そうすると、シスモンディの日記の一部分は彼の夫人の、そして残りの部分は彼自身の指示によって破棄ないし焼却されたのだという現実像が浮かびあがってくるであろう<sup>24)</sup>。

ところで、いま再びとりあげたシスモンディのいわゆる「母と私の秘密の書類」と先のボッスイ侯爵が焼き捨てたといわれる「シスモンディの自筆の書類」とは、いずれもきわめて私的な性格のものであった。しかもシスモンディ夫妻のどちらか一方、または双方にとってはひとに読んで欲しくない内容のものであった。とするならば、それらの「書類」にはシスモンディの日記の一部ばかりでなく母親あての彼の手紙とその下書き、老若男女を問わず親友あての彼の手紙の下書き、彼あての親友からの手紙、彼あての母親からの手紙、などの一部分も含まれていたのではなかろうかと考えられる。

---

*l'œuvre...*, p. [VII] et p. 52 n. 4. この種の見解は、ファニー・アレンをもって嚆矢とする。彼女の所見は前注12と14に掲げた手紙に述べられている。とくに後者の注に掲げた彼女の手紙には編者による解説が添えられており、そこにはファニー・アレンの姪の1人であるエマ・ダーウィンの同様の見解が紹介されている。その編者解説をもあわせて参照されたい。

23) Villari, *op. cit.*, p. 241.

24) ちなみに私は、シュヌヴィエール教授によって非難されたようにボッスイ侯爵が本当に「シスモンディの自筆の書類を焼き捨てた」のだとすれば、それはシスモンディ夫人の指示にしたがったことであつたらうと考えている。この点はボッスイ侯爵あての彼女の委任状によって裏づけることができるかもしれないと思い、1994年4月にそれを所蔵するジュネーブ市役所の官庁記録保管所 (Archives d'Etat) を訪ねてみた。だが、その文書は探したすのに時間がかかるといわれて閲覧を諦めざるをえなかった。

とりわけ母親あてのシスモンディの手紙とその下書きとの一部が焼却ないし破棄という形で処理されたであろうことは、現存することがすでに確認されている両者間の往復書簡の数および日付の著しいアンバランスからもうかがい知られるに相違ない。イタリアの研究者リッチによって公表されたペッシャ町立図書館所蔵のシスモンディ・コレクションの目録と、キオーストゥリ (Margherita Chiostrì) によって公にされたシスモンディ書簡集とに依拠するなら、彼あての母親からの手紙が全部で469点も現存するのにたいして母親あての彼の手紙とその下書きのほうはわずかに96点しか残っていない。しかもそれらのうちの前者の手紙の日付が「1799年4月14日」に発して「1821年5月26日」に及ぶのにたいし、後者の手紙とその下書きの日付は「1800年5月20日」から「1812年9月17日」までと「1815年」とに局限されている<sup>25)</sup>。なるほどサリス

25) 詳言するなら、リッチが公表した当該コレクションの目録にみいだされるシスモンディあての母親からの手紙の日付と点数は、「1799年4月14日～1821年2月19日」付の「468」点、ならびに「1821年5月26日」付の1点であるのにたいして、母親あての彼の手紙の「下書き」のほうは「1800年5月20日～1810年3月31日」付の19点、「1810年4月14日～1812年9月17日」付の15点、および「1815年1月1日～日付なし」の44点のみである。Cf. Ricci, *op. cit.*, rispettivamente pp. 133, 140, 128 e 124. また、キオーストゥリが公にしたシスモンディ書簡集に収められている母親あての彼の「手紙」は「[1808年]4月1日」～「1808年7月7日」付のもの18点にすぎない。Cf. J. C. L. Simonde de Sismondi, *Un viaggio d'altri tempi, 18 lettere-diario*, introduzione e commento di Margherita Chiostrì, Pescia, 1983, pp. 49-126. なお、母親あてのシスモンディの「手紙」はこれ以前にも3度にわたって公にされていた。1度目は「1811年」～「1821年」付の15点のものが彼の日記の例の「諸断片」とともに公表された。Cf. Sismondi, *Fragments...*, pp. 71-78. 2度目には「1815年1月8日」～「1815年8月19～22日」付の40点がヴィッラーリによって公にされた。Cf. *Lettres de Sismondi écrites pendant les Cent-Jours*, publiées par P. Villari, *Revue historique*, 2<sup>e</sup> année, t. 3, janvier-avril 1877, 1<sup>re</sup> fasc., pp. 86-106, et 2<sup>e</sup> fasc., pp. 319-345; t. 4, mai-août 1877, 1<sup>re</sup> fasc., pp. 139-153, et 2<sup>e</sup> fasc., pp. 347-361; t. 5, septembre-décembre 1877, 2<sup>e</sup> fasc., pp. 347-360; 3<sup>e</sup> année, t. 6, janvier-avril 1878, 1<sup>re</sup> fasc., pp. 106-129. そして3度目は「1811年8月30日」～「1813年5月23日」付の8点と「1815年1月1日」～「1815年8月19～22日」付の44点とが、それぞれペツレグリーニ編の『シスモンディ書簡集』の第1巻と第2巻とに収

の伝記に続くシスモンディの生涯にかんする諸研究によれば1813年9～11月、1816年1月～1817年7月の間の断続的な諸時期、それに1819年5月～1820年4月には彼は、ペツシャのヴァルキューサを訪れて母親とともに過ごしていたらしい<sup>26)</sup>から、その間の日付を有する母親あての彼の手紙やその下書きがみられないのは当然のことなのかもしれない。だがそれにしても1815年よりあとの日付を有するものが1点もみいだされえないというのは、たとえば彼が1819年4月にジェスィーとの3年越しの恋を結婚の形で実らせたことや、彼の母親が1821年9月に死去したことなどを考えあわせるなら、やはり不自然なことであると判を下さざるをえない。これらのことからとくに母親あての彼の手紙とその下書きとの一部分については、それらは彼の自筆の日記の一部分と一緒に焼却ないし破棄されてしまったのであろうと推断してよいように思われるのである<sup>27)</sup>。

ただし、母親あてのシスモンディの手紙の何点かはその受取人である母親自身の判断によってすでに焼却されていたのではなかろうかとも考えられる。

---

められたのである。Cf. G. C. L. Sismondi, *Epistolario raccolto, con introduzione e note*, a cura di Carlo Pellegrini, Firenze, vol. 1, [1933,] pp. 345-346, 353-355, 402-404, 408-409 e 413-414; vol. 2, [1935,] pp. 42-58, 60-75, 78-83, 86-113, 116-137, 141-175, 183-188, 190-208, 211-216, 219-224, e 226-295. これらのうちの最初に公表された「手紙」については、その現物の所在がこんにちなお不明のままである。とはいえ同じ15点の「手紙」の中の8点はそっくりそのまま『シスモンディ書簡集』の第1巻に再録されることになった。この書簡集の第2巻には、ペツシャ町立図書館所蔵の「1815年」付の44点の「手紙」が収録されている。それらを2度目に公表された40点の「手紙」とつきあわせてみるなら、後者は前者の一部分であるということが判明するであろう。

- 26) この点についてはさしあたりつぎの文献を参照されたい。Margherita Chiostrì, *Sguardo alla vita e alle opere di J. C. L. Simonde de Sismondi, nella sua Valchiusa racconta...*, pp. 219-221.
- 27) ボッスイ侯爵が焼却したといわれる「シスモンディの自筆の書類」の中に母親あての彼の手紙、またはその下書きが何点か混じっていたに違いないという考えは、すでにサリスによってもほのめかされてはいた。Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 377 n. 2.

フランス革命後の混乱ないしは混迷の状況に鑑みるなら、そしてまた母親あての彼の手紙の中にときの体制をあからさまに批判したりどうみてもそれにそぐわなかったりするようなことを述べたものがあつたとしたなら、わが子の身の安全を考慮してトスカーナ在住の慎重な母親がほかの誰の指図も受けずに彼女自身の発意と責任においてそうした手紙を焼却してしまったとしても、それはけっして理解不可能なことではないからである。彼女にしてみればシスモンディは、離れて暮らしてはいたものの母親を慕って、あるいは彼女の心を慰めるために、頻繁にトスカーナにやってくるかけがえのない一人息子であつた。おまけにその息子は、同地に亡命していた1800年10月までの丸5年の間に3度も逮捕、拘禁された経歴の持ち主であつたのである。

母親あてのシスモンディの手紙ばかりでなく彼がみずからの友人・知人あてに書き送つた手紙の中にもまた、その直接の受取人の、もしくはそのひとの遺産の相続人の、独自の判断に基づいて廃棄されてしまったものがあるかもしれない。友人・知人あてのシスモンディの手紙の中には、さらに、いつの間にか紛失してしまったというようなものもあることであろう。紛失といえ、シスモンディが受けとって後世に伝えた文書類の中にもそうした運命をたどつたものがあるようである。ほんの一例をあげるなら、彼あてのナポレオン一世からの手紙がそうである。この手紙は1870年代に行方がわからなくなつてしまつたらしいのである。ちなみにベルナルディーニ・スタンゲッリーニによれば、1931年7月8日に当時のペッサ町立図書館の館長 マニャーニ (Carlo Magnani) は、同じ手紙について「〔それは〕何年も前にヴィッラーリによつてもちだされたきり返却されることがなかつたのであろう」と報告していたそうである<sup>28)</sup>。

いずれにしても、いま改めて言及した文書類とシスモンディの手紙や日記を

28) シスモンディあてのナポレオン一世からの手紙については主としてつぎの文献に依拠した。Bernardini Stanghellini, *op. cit.*, [1970,] p. 4; 1973, pp. 249-250. なお、本文中の引用はこの文献の1973年版の注4からのものである。

含む彼自身の未公開の作品との一部分は、彼の死後1932年までの間に焼却、破棄、廃棄、または紛失されてしまったとみてよいであろう。と同時に、それらの作品と文書類、つまりは彼本人の「遺産」には、前稿に紹介したようにたとえば彼の夫人ジュシー・アレンやデスイデーリ夫妻ら別人の書類が紛れ込んだり付け加えられたりもした<sup>29)</sup>。こうしてシスモンディの「遺産」は、そっくりそのままの状態においてではなしに構成上の変化を被りながら、ひとからひとへと世代を越えて受け継がれてきた、というわけなのである。

### Ⅲ. シスモンディの「遺産」の行方——1932年まで

シスモンディの「遺産」の中でもとくに彼の自筆の手紙や原稿など手書きのものを掘りおこそうとする試みは、1853年における彼の夫人の埋葬のあとに公然と展開されるようになった。そして80年弱の間にヨーロッパの少なくとも6カ国の20箇所から目当てのものを発掘することに成功した。その成果は、これを収めるのにみずからも一役を果たしたサリスによって一覧表にまとめられ、1932年刊の彼の手になるシスモンディ研究資料集において、「シスモンディの手紙や草稿の保管所」というタイトルのもとに報告された。そこでつぎに、この一覧表に依拠して、その発表の年までにつきとめられた問題の手書きの書類の所在を再確認してゆくことにしよう。

「ドイツ

ベルリン

プロイセン国立図書館 [Preussische Staatsbibliothek], ヴァルンハーゲン・

ヴァン・エンセ [Varnhagen van Ense]・コレクション

ベッティナー・ブレンターノ [Bettina Brentano] あての手紙 1点

(Stern [,] *Die Varnhagen van Ense'sche Sammlung in der Kgl. Bibliothek Berlin* を参照)。

29) この点については前掲の拙稿(完)の111~112ページを参照されたい。



## イギリス

ウェッジウッドウ [Wedgwood] 家

サントレール伯爵夫人 [la Comtesse de Saint-Aulaire] あての手紙、ならびに

ジェイムズ・マキントッシュ卿あての手紙

(P. [-] N. de Puybusque により *Revue historique*, 1914, t. 117に公表された)。

婚約者ジェスィー・アレンあての、および妻あてのシスモンディの未公開の手紙

(上記の文献にみられる de Puybusque 氏の覚え書きを参照)。

エマ・ウェッジウッドウ (チャールズ・ダーウィン夫人) あての手紙 1点  
(*Emma Darwin*, 1915, vol. 2, p. 8 に公表された)。

## デンマーク

コペンハーゲン

王立図書館

フレデリッケ・ブルン [Frederikke Brun] あての手紙 3点、

Ch. -V. ドウ・ボンシュテッテン [de Bonstetten] あての手紙 1点

(*F. Brun Autographen Ny Kgl. S. 40, 1992 i*)。

## フランス

ブロイ [Broglie]

ブロイ城の史料室 [Archives]

オーギュストウ・ドウ・スタール [Auguste de Staël] あての手紙 2点。

モンペリエ [Montpellier]

ファール博物館 [Musée Fabre]

アルバニ伯爵夫人あての手紙 78点

(Saint-René Taillandier により 1863年にパリで公表されたあと、Pélissier, *Le Portefeuille de la Comtesse d'Albany*, Paris, 1902, ならびに *Revue d'histoire littéraire*, 1908, t. 15, p. 491 et suiv. によって補完された)。

## パリ

国立図書館, 写本・手稿部 [Département des manuscrits]

ドゥ・ベロック [de Belloc] 氏あての手紙 1点,

گران [Guérin] 画伯あての手紙 1点

(*Nouvelles Acquisitions françaises* 6905 と 20 952 f° 281)。

#### イタリア

ブレッシャ [Brescia]

パオロ・ゲッリーニ卿 [Don Paolo Guerrini]

カミッロ・ウゴーニ [Camillo Ugoni] あての手紙 11点。

フィリッポ・ウゴーニ [Filippo Ugoni] あての手紙 6点。

ボローニャ

市立図書館 [Biblioteca Comunale]

アキッレおよびフランチェスカ・メノッティ [Achille et Francesca Menotti] あての手紙 2点

(*Carte Menotti* n° 2 et 3)。

フィレンツェ

国立図書館, ヴューソー書簡集 [*Carteggio Vieusseux*]

J・P・ヴューソーあてのシスモンディの手紙

(A. Frènes, *Revue internationale*, 5<sup>e</sup> année, Rome, Forzani, 1888,  
および C. Pellegrini, *Note sismondiane*, Ferrara, 1930 において公表  
された)。

フズィニャーノ [Fusignano]

C・ピャンカステッリ [Piancastelli] 博士

ヴィンチェンツォ・モンティ [Vincenzo Monti] あての手紙 2点。

リヴォルノ [Livorno]

市の歴史資料室 [Archivio storico cittadino]

フィレンツェの書籍印刷販売業者ピアッティ [Piatti] あての手紙 27点

(*Autografoteca Bastogi*, cassetta 54, inserto 1173)。

ジョッティ [Giotti] あての手紙 1点。

ミラノ

ブレラ図書館 [Biblioteca Braidense]

旧姓をヴェッリ [Verri] というフルヴィーア・ヤコペッティ [Fulvia  
Jacopetti] あての手紙 2点

(*Carteggio di A. Manzoni*, vol. 4, 2<sup>e</sup> partie, pp. 578, 628 に公表された)。

モーデナ [Modena]

エステ図書館 [Biblioteca Estense]

手紙 3点。

ペツシャ

ヴァルクューサの家敷（デスイデーリ家）

ここに埋もれていた書類のうちの多くのものについては、ヴィツラーリが『歴史評論』 [*Revue historique*] 誌の1876年発行の第1号の241〔～242〕ページにそのリストを掲げてくれている。われわれはそこからつぎの4つの種類の手稿を読みとっている。

i) シスモンディの著書と小品。

ii) 覚え書き、抜き書き、手紙の下書き、作文、さまざまな習作、青年時代の詩。

iii) 妹サラ・フォールティ [Sara Forti] あての手紙。

iv) シスモンディあてにアルバニ伯爵夫人、スタール夫人、バンジャマン・コンスタン、J・P・ヴューソー、ウーゴ・フォスコロー、ペッレグリノ・ロッシ [Pellegrino Rossi]、ラファイエットウ、ウェリントン [Wellington]、ギゾー、ミシュレ [Michelet]、その他の人々から送られた手紙。

1815年の日付を有する母親あてのシスモンディの手紙 39〔正確には40〕点 (Villari により *Revue hist.*, 1877-1878, t. 3 à 6 に公表された)。

〔第一〕帝政と百日天下とにかんする覚え書き〕

(Villari により *Revue historique*, 1879, t. 9 に公表された)。

シエーナ [Siena]

市立図書館

チェルソ・マルツッキ [Celso Marzucchi] あての手紙 1点。

トリノ [Torino]

市民図書館 [Biblioteca Civica]、コッシーラ・コレクション [*Raccolta Cossila*]

スクロピス伯爵 [le Comte Sclopis] あての手紙 1点。

ニコリーニ [Niccolini] あての手紙 1点。

ジュスティ [Giusti] あての手紙 2点。

## スイス

### ジュネーヴ

#### a) 大学公共図書館 [Bibliothèque publique et universitaire], 写本・手稿部

さまざまな人物にあてた手紙 79点

[このうちのエティエンヌ・デュモン (Étienne Dumont) あての手紙 8点はサリスにより、本稿の注30に掲げる文献の1～18ページに公表された]。

パリの出版社トゥローテル・エ・ヴュール [Treuttel et Würtz] あての手紙 148点。

シャルル・ドゥ・コンスタン [Charles de Constant] あてのシスモンディの手紙 数点,

上記の数 [79点] には含まれていないこの手紙は、H・ファズィー [Fazy] によって『ジュネーヴ国立学士院紀要』[*Bulletin de l'Institut National Genevois*] の1882年発行の第24巻に公表された。

アルプス山脈の中立性についての意見書, ならびに

マルク=オーギュストウ・ピクテ [Marc-Auguste Pictet] あての手紙 数点,

上記の数には含まれていないこれらの文書は、W・-E・ラパール [Rappard] によって『スイス史案内』[*Indicateur d'histoire suisse*] の1918年発行の第49年度版に公表された。

#### b) 官庁記録保管所(市役所) [Archives d'Etat (Hôtel-de-Ville)]

##### i) 家族文書

リゴー [Rigaud] III

ジャン=ジャック・リゴー [Jean-Jacques Rigaud] あてのシスモンディの手紙 5点。

ピクテ・ドゥ・ロシュモン [Pictet de Rochemont] III

シャルル・ピクテ・ドゥ・ロシュモンあての手紙 2点。

##### ii) 公正証書

シスモンディの夫婦財産契約書。

ブル・ドゥ・フル [Bourg-de-Four] 広場に面した彼のビルの売買契約書。

ピエール・ジロー [Pierre Girodz] (シスモンディの母方の祖父) の遺言書。

ジェデオン=フランソワ・シモンドゥ [Gédéon-François Simonde] (シスモンディの父) の遺言書。

シスモンディの遺言書

[サリスにより、本稿の注 30 に掲げる文献の 35~39 ページに公表された]。

シスモンディの死亡にかんする公知証書。

ベニーニョ・ボッスイ侯爵あてのシスモンディ末亡人の委任状。

iii) シスモンディによって作成された [フランス共和暦] 第11年から第13年までのジュネーヴ商業会議所議事録。

iv) 1815年10月19日の日付を有する関税復活法案についての報告書

[サリスにより、本稿の注 30 に掲げる文献の 19~34 ページに公表された]。

c) ジュネーヴのエミール・リヴォワール [Emile Rivoire] 氏のコレクション

『フランス通信』[*Courrier Français*] 紙編集部あての手紙 1点。

シャフハウゼン [Schaffhausen]

市立図書館 [Stadtbibliothek]

ジャン・ドゥ・ミュラーあての手紙 2点

(当該図書館の印刷された「目録」を参照。)<sup>30)</sup>

いささか引用が長すぎたかもしれないが、1932年までにつきとめられていたシスモンディの「遺産」のうちの手書きの書類の所在をこれほど網羅的に示したものは、ほかにはないのである。もちろん、ここには1点の遺漏もないというのではない。同年までに公表されたシスモンディの手紙の中には、ここに採録されていないものも何点かある<sup>31)</sup>。それらの手紙の出所は、少なくとも公表

30) Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents...*, pp. 56-58.

31) たとえば1857年には、モジョン夫人あての25点の手紙、イタリアの一神父あての1点の手紙、オラリ・サントレール (Eulalie Saint-Aulaire) 嬢あての23点の手紙、そ

者たち自身には十分によく知られていた。だが彼らは、意図的にであれそうでなかれ、その出所を明らかにしなかった。彼らとコンタクトをとることは、この一覧表を作成しようとしていた頃のサリスにとっては非常に困難であったか、あるいは不可能であった。彼には、それらの手紙の出所をたやすための手がかりがなにひとつなかった。とすれば、彼が作成したこの一覧表に若干の遺漏があるのはやむをえないことであろう。

それよりむしろ、ここに採録されている手書きの書類の所蔵主体と所在地とに目を向けてみよう。そうするとまず、所蔵主体の全体の3/4は図書館その他の施設であるということがわかるであろう。個人の手もとではなしに図書館等の施設に収められてあたかも人類の共有財産であるかのごとくにとり扱われている文献の場合には、概して他に移譲されることはきわめて稀である。しかも、ここに記載されている所在地とはまったく無関係の場所において1932年に降にシスモンディの「遺産」が大量に発見されたというような話は、これまでに一度も聞いたためしがない。とするならば、いま引用したサリスの手になる一覧表は現在でもなお参照に耐えうるものであるといつてよいであろう。

さて、その一覧表をひと通り見渡してすぐに気がつくのは、「イタリア」の「ペッシャ」の「ヴァルキューサの屋敷」と「スイス」の「ジュネーヴ」の「大学公共図書館」と「官庁記録保管所」とに割り当てられた紙幅が著しく大きいということであろう。このことは一体何を物語っているのでしょうか。それら3つの箇所には断然多くの点数の書類がみいだされるということなのであろうか。必ずしもそうではないようである。念のためにもう一度一覧表をみると、確かに「ペッシャ」の「ヴァルキューサの屋敷」と「ジュネーヴ」の「大学公共図書館」のところには、ほかよりもはるかに多くの点数の書類が認められる。だが、「ジュネーヴ」の「官庁記録保管所」のところに記載されている書類の点数(16点)は、比較的小さな紙幅しか割かれていない「フランス」

---

れにチャニング(Channing)氏あての7点の手紙が、いずれもつぎの文献において公表されていた。Sismondi, *Fragments...*, pp. 109-230.

の「モンペリエ」の「ファール博物館」や「イタリア」の「リヴォルノ」の「市の歴史資料室」等のところにみられるそれよりもむしろ少ないのである。ゆえに、問題の3箇所には際立って大きな紙幅が割り当てられているからといってそこには断然多くの点数の書類がみいだされるのであろうなどと早合点するわけには必ずしもゆかない。

「ペッサ」の「ヴァルキューサの屋敷」と「ジュネーヴ」の「大学公共図書館」と「官庁記録保管所」とに割かれた紙幅が著しく大きいのは、ほかの17箇所とは違ってそれらの3箇所には多種多様な書類がみいだされるということと関係しているのであろう。少なくとも上掲の一覧表をみるかぎり、ほかの17箇所にはただ1つのジャンルのもの、すなわち手紙だけしか認められない。これにたいして例の3箇所には、手紙以外のジャンルのものも掲げられているのである。

ただしジャンルの多様性ということからすれば、これらの3箇所の中では「ジュネーヴ」の「大学公共図書館」のところに掲げられている書類がもっとも貧弱であるように見える。なぜならそこには、手紙以外のものとしてはわずかに「アルプス山脈の中立性についての意見書」の1点が認められるにすぎないからである。と同時に、他の2箇所には実にさまざまなジャンルの書類がみいだされるからでもある。とりわけ「ジュネーヴ」の「官庁記録保管所」のところにみられるものには、たとえば「シスモンディの死亡にかんする公知証書」や「ベニーニョ・ボッスィ侯爵あてのシスモンディ未亡人の委任状」などといった「公正証書」までが含まれているのである。

だがしかし、いまひきあいにした2点の「公正証書」はまぎれもなくシスモンディの「遺産」にあとから付け加えられたものなのであって、彼本人の「遺産」に視野を限定するならば、「ジュネーヴ」の「官庁記録保管所」のところにみられる書類は「ペッサ」の「ヴァルキューサの屋敷」のところにみいだされるそれよりもいっそう多様性に富んでいるとはいいい難い。むしろ逆である。後者のところには、前者などとは比べものにならないほどに多種多様な

書類が記載されているのである。

しかもその「ペッシャ」の「ヴァルキューサの屋敷」のところに記載されている書類には、未公表のものが数多く含まれている。その数たるや、ほかの16箇所にみられる未公表の書類を全部あわせた数よりもさらに多いのではなかろうかと思われるほどなのである。この点からも、「ペッシャ」の「ヴァルキューサの屋敷」のところにみいだされる書類はもともと注目に値するということができるであろう。ちなみに、一覧表の中の都合17箇所に認められるシスモンディの未公表の手紙の大部分は、のちにペッレグリーニらの編集にかかる『シスモンディ書簡集』<sup>32)</sup>に収録されることになったとみてよい。

こうして、1932年にサリスによって披露された「シスモンディの手紙や草稿の保管所」と題する一覧表を幾つかの異なった観点からながめてみると、「ペッシャ」の「ヴァルキューサの屋敷」のところに掲げられている書類がいかに重要なものであるか、見当がつくであろう。それはどの観点からしても、ほかのどこにみられるものよりもいっそう注目に値するのである。

#### IV. おわりに

以上みてきたように、シスモンディが残した「遺産」、わけても彼の存命中には公にされることのなかった彼自身の作品と彼が受けとって後世に伝えた文書類との一部分は、1932年までの間に焼却、破棄、廃棄、あるいは紛失されてしまった。その間にはまた、彼の夫人ジェスィー・アレンやデスィデーリ夫妻らの、つまりは別人の書類がシスモンディ本人の「遺産」に付け加えられたり紛れ込んだりもした。こうして彼の「遺産」は、構成上の変化を被りながらひとからひとへと世代を越えて受け継がれ、1932年までにヨーロッパの少なく

32) Sismondi, *Epistolario raccolto...*, a cura di Pellegrini, vol. 1: 1799-1814, [1933]; vol. 2: 1814-1823, [1935]; vol. 3: 1824-1835, [1936]; vol. 4: 1836-1842 e appendice, [1954]; *idem*, *Epistolario*, vol. 5: *Lettere inedite a Jessie Allen (Madame de Sismondi)*, a cura di Norman King e Robert de Luppé, Firenze, [1975].



とも6カ国の20箇所に保存の場をみいだすこととなった。それら20箇所のうちのどこにどのような「遺産」がどれだけ保存されていたのかは、サリスの手になる一覧表によって知ることができた。そしてその一覧表から、私たちは、「ペッシャ」の「ヴァルキューサの屋敷」にみられたシスモンディの「遺産」がどの点においてももっとも注目に値するということを読みとったのである。

しかるにサリスは、その「ペッシャ」の「ヴァルキューサの屋敷」にみいだされたシスモンディの「遺産」についてはもっぱらヴィッラーリによる調査の結果に依拠していたのであって、みずからはその重要な「遺産」の現物をみてはいなかった。この点は、彼のシスモンディ伝の中に当該「遺産」を参照した形跡がまったくみられないということからもうかがい知ることができる。いや、それよりなにより同じ伝記の「新版への序文」の中でサリス自身がはっきりと認めてさえいる。「私がこの伝記を仕上げたころには、それ〔ペッシャに存在するシスモンディの『遺産』〕はまだ研究者たちにとって利用しうる状態にはなかったのである」<sup>33)</sup>、と。

したがって、その伝記において提示されたサリスのシスモンディ像を相対化するためには、なによりもまず「ペッシャ」の「ヴァルキューサの屋敷」にみいだされたシスモンディの「遺産」を実際にひもといてみる必要があるということになる。ところが、そう思ってヴァルキューサの屋敷に足を運んでみても、そこにはもはや問題の「遺産」はみることができない。それは、現在ではペッシャの町立図書館のほうに収められているのである。とすれば、どのような経緯でいつごろ図書館に移管されることになったのかという疑問が生じてくるであろう。そこで、シスモンディの「遺産」の行方を追跡する私の仕事の第2弾ともいふべき続稿においては、ペッシャ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」の成立過程をその本源的なところから辿りなおし、そうする中で、いま呈されたばかりの疑問を解決することにしたいと思うのである。

33) Jean-R. de Salis, Préface à la nouvelle édition, dans son *Sismondi, 1773-1842*, [réimpression des éditions de Paris, 1932,] Genève, 1973, t. 1, p. 3.